

# SIMIC モデルの検証

～新入生の人生の変化に関わる集団の変容と精神的健康に着目して～

○大塚萌笑・中島健一郎

(広島大学教育学部第五類心理学系コース)

## 問題と目的

私たちは生きていくと、日常的な行動パターンを崩すような経験や出来事（進学、病気など）によってもたらされる人生の変化に直面する。人生の変化によって、他者との関係が変化することでアイデンティティの再構築が促される (Haslam 2021)。人生の変化とアイデンティティの関連性について、社会的アイデンティティの側面から考えると、変化に対応するために個人が他者や所属集団からのサポートを必要としているにもかかわらず、人生の変化においてはサポートの源泉たる社会的アイデンティティも変化するため、必要なサポートが提供されなくなり、健康が損なわれる可能性が高い。そこで、人生の変化に対する人々の多様な反応を予測、説明するモデルとして、Haslam (2018)は、SIMIC モデル (Social Identity Model of Identity Change) を提案した。このモデルは、人生の変化に至るまでの期間に複数の集団に所属することの重要性を強調し、健康や well-being に影響を及ぼすことを示す。モデルの仮説が支持されるなら、人生の変化に至るまでの期間に複数の集団に所属していれば、人生の変化が起こったとしてもその変化に上手く適応し、健康と well-being が保たれることが示される。本研究では、その第一歩として SIMIC モデルの妥当性の証拠を得るため、モデルについて日本人サンプルの横断データで検証することを目的とする。

## 方法

**調査参加者** 大学1年生 295名

**手続き** 複数の集団への所属感、既存、および新規の集団に対する集団成員性、抑うつ傾向、well-being を測定するため、質問紙調査を実施した。

**使用した質問紙尺度** Exeter Identity Transition Scales (Haslam et al., 2008), 集団同一視尺度 (Karasawa, 1991), 東大式自記健康調査票 THI (青木, 1974), 主観的幸福感尺度 (伊藤他, 2003) の計4つの尺度を使用した。各尺度に対して因子分析を行い、尺度の妥当性と信頼性を確認した。

**分析方法と結果の予測** 横断データで想定される結果のパス図を想定 (Figure 1) し、構造方程式モデリング (SEM) により検討する。大学入学前に複数の集

団成員性を持っていたという認識が、大学入学後の準拠集団への帰属意識と大学入学前の準拠集団への帰属意識を高めることを通して、well-being が高まるのに対して、抑うつが低まることを予測している。

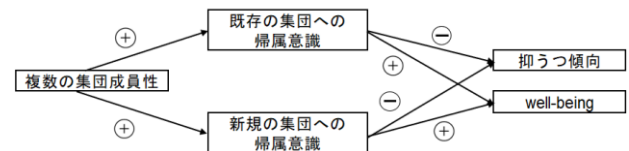


Figure 1. 想定される結果のパス図

## 結果

各尺度で因子分析を行い、採用した因子構造を用いて SEM を実施した結果、構造方程式モデルの適合度指標が基準を満たさなかった (CFI=.976, RMSEA=.110, SRMR=.044)。

また探索的分析として、先行研究で報告されている因子構造で Figure 1 に沿ったパスモデルを検討したが、構造方程式モデルの適合度指標が基準を満たさなかった (CFI=.947, RMSEA=.155, SRMR=.049) (Figure 3)。

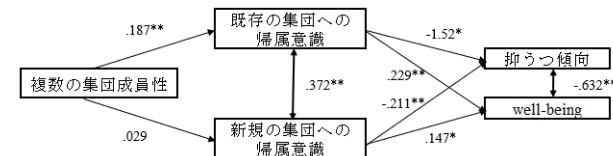


Figure 3. 探索的分析で得た構造方程式モデル

## 考察

本研究では、想定していたパス図は適合度指標の基準を満たさなかったものの、相関分析の結果を踏まえると、人生の変化前に複数の集団成員性を持っていたことは、既存の集団への帰属意識を維持させ、集団への帰属意識を持っていると、well-being が高まり、抑うつ傾向が低まること示唆される。今後は、本研究の結果を参考にしつつ、縦断調査による検討へと進める。

## 引用文献

Catherine Haslam, S. Alexander Haslam, Jolanda Jetten, Tegan Cruwys, and Niklas K. Steffens (2021). Life Change, Social Identity, and Health. *Annual Review of Psychology*, 72, 635–661.